

## 沖縄研究第2回

今回は、沖縄戦と基地問題を考えてみましょう。

### <沖縄戦について>

<沖縄戦の犠牲者数(いろいろな数があるがこれが公式に厚生省の公認した数)>

※ まず犠牲者数のまとめをしてみましょう

総数 \_\_\_\_\_

米軍側 \_\_\_\_\_

日本側 本土出身軍人軍属 \_\_\_\_\_

沖縄県出身軍人軍属 \_\_\_\_\_

戦闘参加者 \_\_\_\_\_

一般住民 \_\_\_\_\_

当時の県民の1/4という大変な数の住民が犠牲になった。米軍の( )人という犠牲者数も、他の激戦地といわれるガダルカナル島 1,598人、レイテ島 3,500人と比べると大変多い。米軍の戦死者数だけからも、沖縄戦は太平洋戦争で最大の戦闘だったことがわかる。

波照間島では強制移住によるマラリアで住民の( )%が病死。それ以外でも病死・餓死などによる犠牲者を含めると一般住民の犠牲者は15万人に増える。また、朝鮮人の戦没者約1万人は含まれていない。

### <戦闘協力者とはなにか>

上記の中で「戦闘参加者」という言葉が、何をさしているのかわかりにくい。戦闘参加者とは軍人や軍属ではないのだろうか? 「戦没者遺族等援護法」という法律が1952年に制定されたが、一般に本土では空襲で死亡した市民などには、まったく何も保障はされていない。沖縄は直接の戦地であり犠牲も多いということで、この法律を広く運用して「非戦闘員でも、軍に協力したこと」が申請され証明されれば保障されることになった。「軍に協力」というのは、「陣地の構築」などだけでなく、「食料の供出(軍に食料をとられたも)」、「壕の提供(軍に壕から追い出されたなども)」、「集団自決」なども含まれており、きわめて幅の広いものとなっている。したがって戦闘参加者には幼児も含まれている。また申請によって「一般住民」から「戦闘参加者」へ人数が少しずつ動いている。

### <沖縄戦は成功 軍隊の論理>

「ああすれば良かったという点はあるが、作戦全般としては沖縄作戦は成功だったと思う」(防衛庁戦史室編『沖縄方面陸軍作戦』)「まず、侵入者に硫黄島や沖縄のような犠牲者を予想させる位の善戦をする能力を持つことが理想です」(文芸春秋『戦略的思考とは何か』)

これが軍隊の論理。作戦の目的(少しでも長く戦争を続けること。敵の犠牲者を増やすこと)にそったということでは沖縄戦は大成功。多くの住民の犠牲がでたことは「軍隊としての作戦が成功したかどうか」では問題にならないことなのである。

### <現地自給と違法な動員>

沖縄は本土防衛の捨て石作戦だったため、兵力も装備も不十分だった。そのために現地で多くの兵員が募集された。これが「防衛隊」。防衛隊は本来は（ ）才以上（ ）才までの男子が召集されるものだったが、実際には15才の少年から50以上の老人までが動員された。

また、中学校・女学校の生徒も動員された。もともと17才未満の青少年の戦争参加は当時としても違法だったが、結局男子1700名、女子550名が従軍した。(学徒隊) こうした防衛隊の6割、学徒隊の5割が戦死した。

### <渡嘉敷島と集団自決>

渡嘉敷島では他の島や地区にくらべても数多くの集団自決がありました。それはなぜだったのでしょうか? (「沖縄修学旅行」の沖縄戦の記述 p24 を参照)

### <体験談の感想>

※別紙の体験談を読んで感想を書いてみてください

資料 沖縄戦体験談 ガラビヌヌマチガマより衛生兵の証言 血であがなったもの 写真

## <基地について>

※別紙資料を読んでそれぞれの考えを書いてみてください。

資料 基地について 1995年総決起集会での高校生代表のあいさつ